

いかに海馬をダメすか、世界一のドラマーの教え方

年末に、初任者の授業を参観させてもらった。初々しい授業は見ていて気持ちの良いものだったが、50分の授業の中でここが大事だと何度か強調されていたのが、印象に残った。なるほど、自分はこういう風にやっていたかとふと考えた。

東京大学大学院教授の池谷裕二氏（脳研究者）によると、外部からの情報は脳の海馬というところで仕分けられ、生命の存続に役立つようなものだけが長期記憶に送られるとのこと。そうであるならば、古典単語や数学の公式は覚えた先から忘れ去られる運命にあるわけで、初任者の先生は声を大きくしたり、ラインマーカーで線を引く指示をしたりして、生徒の海馬をだまそうとしていたことになる。大事だと言われて大事だと思うか、それとも、やはり、自分が大事だと気づかないと大事だと思わないか。このあたりの加減を海馬なるものに聞いてみたいと思うのは、私一人ではないだろう。

さて、落語の長い演目を聴いていると、どうやって覚えるのかと興味がわく。落語家の世界は、入門順による縦社会だから、師匠や先輩の言うことが絶対。少なくとも数年の間は、多くの時間を拘束され、師匠のお世話に忙殺される。そうした修行期間の後に、ある時から師匠が演目を弟子の目の前でやってみせて、弟子はそれを見よう見まねで覚えるらしいが、やはり覚える（語る調子を身につける）のにコツらしきものがあるとは思えない。カンが良いか悪いかだけで決まるのかも知れないが、このカンだけは言われて分かりましたとなるものではないから、つらい修行時代に身につくつかつかないか、ではないだろうか。やはり、合理性は全然ないが、師匠のそばで過ごす修行時代が落語家になってから、全く役に立たないものだとは思えない。もちろん、師匠はいちいちここが大事なんて、その都度教えたりはしないだろうが。

モダン・ジャズ・ドラミングの元祖と言われたマックス・ローチ氏（2007年死去）が師の一人として仰いだのが、ハイチの伝説的なパーカッショニストであるチローロ氏。マックス・ローチ氏が1977年のインタビューの中で、チローロ氏について次のように語っている。「ぼくたちがアメリカで音楽を教わるやり方は、ヨーロッパ流だから、教科書を見ながら先生がああしろこうしろというとおりにやるだけだ。だからぼくがチローロの教え方を見たときにはびっくりした。というのは、チローロは生徒たちを隣の部屋に行かせて、壁越しに教えるんだ。こっこの部屋で彼がタイコをたたくと、むこうの部屋でそれを聞いた生徒たちが、その音を自分で出してみるんだ。なぜそういう教え方をするのかとチローロに聞いたら、手の大きさも腕の強さもひとりひとり違ってらんだから先生と同じたたき方をしても同じ音が出るとは限らない。だから自分自身で工夫して音を出すように指導してるんだ、と答えてくれた」（中村とうよう氏著書より引用）カタチから音を学ばせるか、音そのものから音を学ばせるか。どちらがドラマーとしての成長につながるかは自明のことではないだろうか。

教育に効率を持ち込まないで良いならば、大事なことを大事だとすぐには教えずに、できるだけモタモタさせて、気づくのを気長に待つのが一番良いかもしれません。ただし、その時にどういう風に記憶するかは、海馬に聞いてみないと私には分かりませんが。

令和5年1月10日

大村城南高等学校長 中小路尚也